

<プログラム>

R.シューマン：交響曲 ト短調 WoO 29「ツヴィツカウ」(前田昭雄 編)

Robert Schumann : Symphonie, g-Moll "Zwickauer" WoO 29（herausgegeben von Akio Maeda）

- | | |
|-----|--|
| I. | Moderato - Allegro molto |
| II. | Andantino quasi Allegretto - Intermezzo quasi Scherzo : Allegro assai |

W.A.モーツァルト：ピアノ協奏曲 第17番 ト長調 KV453

Wolfgang Amadeus Mozart : Konzert für Klavier und Orchester Nr.17, G-Dur, KV453

- | | |
|------|------------|
| I. | Allegro |
| II. | Andante |
| III. | Allegretto |

<休憩>

R.シューマン：交響曲 第1番 変ロ長調 Op.38「春」

Robert Schumann : Symphonie Nr.1, B-Dur, Op. 38 "Frühlings-Symphonie"

- | | |
|------|---|
| I. | Andante un poco maestoso - Allegro molto vivace |
| II. | Larghetto |
| III. | Scherzo : Molto vivace |
| IV. | Allegro animato e grazioso |

<プロフィール>

指揮 石川 星太郎 Seitaro Ishikawa

1985年、東京都三鷹市生まれ。東京藝術大学音楽学部指揮科、ロベルト・シューマン大学デュッセルドルフ指揮科卒業。藝大在学中より室内アンサンブル集団「アンサンブルシュテルン」、演奏会シリーズ「東京私的演奏協会」を主宰し活発に演奏活動を行い、2007年にはアンサンブルシュテルンを指揮し細川俊夫「恋歌Ⅲ」を日本初演した。また2006年以降は武生国際音楽祭（にレギュラー演奏家として毎年出演している。また故ゲルハルト・ボッセのアシスタント指揮者としての任も担い、2013年以降はボッセの後任として神戸市室内合奏団の3月定期演奏会の指揮者を務めている。国内ではこれまでに読売日本交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、大阪交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、神戸市室内合奏団を指揮。海外でもスイス、イタリア、ベルギー、ドイツ、韓国などで数多く指揮している。とくに2015年1月ソウル・アート・センターでの「日韓国交正常化50周年記念コンサート」では、日韓のプロによる史上初の合同編成オーケストラの指揮者として韓国側から推薦を受け好評を博した。レパートリーはバッハの宗教曲から現代音楽まで広範。武生国際音楽祭では国内外の多くの新作初演を行っており、若手作曲家たちからの信も厚い。これまでに指揮を田中良和、ハンス＝マルティン・シュナイト、ゲルハルト・ボッセ、リュウディガー・ボーンに師事、ピアノを林達也、ユラ・マルグリスに師事。藝大卒業時にアカンサス音楽賞受賞。2015年ドイツ大学オーケストラ指揮者コンクール、セミファイナリスト。同年国際リヒャルト・ワーグナー協会奨学生。2016年・第1回フェリックス・メンデルスゾーン国際指揮者コンクール第2位受賞。

ピアノ ソフィー=真由子・フェッター Sophie-Mayuko Vetter

札幌生まれ。父はドイツ人で現代音楽家のミチャエル・フェッター、母は日本人。4歳からピアノ、倍音唱法、音楽理論と作曲を学ぶ。6歳で家族とともにドイツへ移住、倍音唱法のデュエットを作曲し150曲以上を記録した。7歳でザルツブルクのモーツァルテウムでピアノリサイタルを開く。8歳の時、自身の作曲したオリジナル作品集「音絵」が西ドイツ放送協会ラジオ局の特集番組で放送された。9歳で史上最年少でフライブルク音楽大学のVorklasseIに入学。これまでにE.ピヒト=アクセンフェルト、ヴィダリー・マルグリス、ロバート・ヒルに師事。2005年、クラシック音楽会の最高峰ザルツブルク音楽祭に、ピアノ協奏曲のソリストとして初出演。音楽評論家ヨアヒム・カイザーは「貴女の演奏はいずれの瞬間も完璧な技術とアーティキュレーションに裏付けられたものです。この第一印象は深く心に残るものでした。エレガントで滑舌な演奏、嘆ずるべくデリケートに演奏された装飾音符（この装飾音符は普段は主旋律を押し潰さんばかりに主張され気味です）。これほど麗しく繊細であり見事なまでの技術は、聴いていて嬉々たる気持ちになります。貴女は完成されたピアニストであるだけでなく、感受性深い音楽家でもあります。」と評している。圧倒的な活動実績はもちろんのこと、音楽そのものがそのクオリティーの高さを語っており、受賞歴は十指に余る。ピアニストとして、フォルテピアノや現代のピアノで歴史的な奏法を試みる一方で、現代音楽に深く傾倒し、数多くの名高い作曲家から作品を献呈されている。活発な演奏活動のほかにも音楽学の執筆行動を行い、日本文学を用いたプロジェクトも行った。また多くの国際的なテレビ・ラジオ番組に出演。15歳で国際パークデービス受賞デビューCDとしてショパンの「24の前奏曲」を録音して以来、これまでに14枚のCDをリリースした。近年ではブラームス、ルジツカ、リスト、モーツァルト(ハンブルク・シンフォニカ)、マーンコップ(ウィーン放送交響楽団)等のアルバムをリリースした。オフィシャルHP：http://www.sophie-mayuko-vetter.de/

神戸市室内合奏団 Kobe City Chamber Orchestra

1981年、神戸市によって設立された神戸市室内合奏団は、実力派の弦楽器奏者たちによって組織され、神戸、大阪、東京などを中心に、質の高いアンサンブル活動を30数年に亘って展開している。弦楽合奏を主体としながらも、管楽器群を加えた室内管弦楽団としての活動も活発で、バロックから近現代までの幅広い演奏レパートリーのほか、埋もれた興味深い作品も意欲的に取り上げてきた。また定期演奏会以外にもクラシック音楽普及のための様々な公演活動を精力的に行っている。

1998年、巨匠故ゲルハルト・ボッセを音楽監督に迎えてからの14年間で演奏能力並びに芸術的水準は飛躍的な発展を遂げ、日本を代表する室内合奏団へと成長した。毎年のシーズンプログラムは充実した内容の魅力あふれる選曲で各方面からの注目を集め、説得力ある演奏は高い評価を受けている。内外の第一線で活躍するソリストたちとの共演も多く、2011年3月の定期演奏会でのボッセ指揮によるJ.S.バッハ「ブランデンブルク協奏曲全6曲」の名演のほか、メンデルスゾーン「第三交響曲スコットランド」、ベートーヴェン「第四交響曲」などがCD、LPとしてリリースされている。また、2011年9月にはドイツのヴェストファーレンクラシックスからの招聘を受けてドイツ公演を行い、大成功を収めている。

2013年度からは、日本のアンサンブル界を牽引する岡山潔が音楽監督に就任し、ボッセ前音楽監督の高い理念を引き継ぎ、合奏団のさらなる音楽的発展を目指して、新たな活動を展開している。



石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

石川 星太郎

神戸市室内合奏団 定期演奏会

第138回定期公演

時流を読む者 ― 正統から独創を築き上げた人々 ―

春。ロマン派交響曲の誕生

【神戸公演】2017年3月 9日（木）19：00 開演
神戸新聞 松方ホール

【東京公演】2017年3月11日（土）14：00 開演
紀尾井ホール

神戸市文化振興財団 文化庁 助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

主催：（公財）神戸市民文化振興財団・神戸市



神戸市文化振興財団

文化庁

文化庁

プログラム・ノート

中村 孝義（大阪音楽大学名誉教授・音楽学）

神戸市室内合奏団の2016年度最後の定期演奏会は、シューマンに光を当てるプログラム。この本当に天才的な閃きに満ちたロマンティシズムの権化ともいうべき作曲家は、その鋭敏すぎる感性の故に、我が国では少し近づき難い存在として、残念なことだがあまり人気がない。しかしだからこそ音楽の美的本質をしっかりと掴み、それをより多くの人に伝えていこうという高邁な理想を持つ岡山潔監督率いる神戸市室内合奏団は、毎年のようにシューマンの重要な作品を取り上げ続けている。作曲家であれ、演奏家であれ、聴衆であれ、出会いというものがその人のあり方に決定的な役割を果たすことを考えれば、こうした出会いに満ちたプログラムを続けることは極めて重要なことである。

今回は、これまでほとんど実演で取り上げられる機会のなかった、シューマンが22歳の時、故郷ツヴィッカウで作曲した未完の「交響曲ト短調」を紹介することでまず彼の交響曲創作の原点を示し、メインにその9年後に、ドイツ人の手になる真にロマン的な交響曲を目指して作曲された交響曲第1番「春」を演奏することで、シューマンという作曲家の交響曲に対する姿勢や資質の豊かさを示そうという非常に興味深いプログラム。シューマンと言えば、わが国ではとかくそのピアノ作品や歌曲に関心が偏りがちだが、ベートーヴェンやシューベルトの偉大な交響曲に大きな刺激を受け、いつかはその正統を継ぎつつ独創的な作品をと念じて作曲されたその交響的作品にも、見るべきもの、聴くべきものが少なくないことを、これまでの共演でも充実した成果を残している石川星太郎と神戸市室内合奏団のコンビが、改めて知らしめてくれることになるだろう。あわせて、モーツァルト円熟期のピアノ協奏曲での、近年ヨーロッパでの活躍が目目されるソフィ=真由子・フェッターとの共演も大きな楽しみだ。

R.シューマン（1810～1856）交響曲ト短調 WoO 29「ツヴィッカウ」(前田 昭雄 編)

ライプツィヒ大学の法科学学生であった1828年から29年にかけて、ゲヴァントハウスで聴いたベートーヴェンの交響曲連続演奏は、シューマンにとって音楽家になることを決心させる重要な契機の一つになったが、その時以来、交響曲を作ることは、彼にとって人生で最も重要な目標の一つとなった。その後も様々な試みを通じてそのイメージは育まれていくが、その最初の本格的な試みとなったのが、1832年に生地ツヴィッカウで着手されたこの「交響曲ト短調」であった。

その第1楽章初稿は、1832年の11月に、何と後に夫人になるピアノの名手クララ・ヴィークの演奏会の時に初演されている。ただ師のヴィークの批判などを受け直ちに改訂が加えられ、翌1833年2月には、第1楽章の第2あるいは第3稿が隣町シュネーベルクで、さらに4月には、ライプツィヒのゲヴァントハウスにおけるクララの演奏会で演奏された記録が残されている。第2楽章から第4楽章までのスケッチも1832年の11月以降に試みられたようだが、その後シューマンは、この作品を完成することに関心を示さず、結局未完のまま捨て置かれることになった。第2楽章以降の楽章が演奏された記録は残されていない。

ただ本日使用される第1楽章、第2楽章のスコアを編んだ日本を代表するシューマン研究者である前田昭雄氏は、第2楽章に関しては二つの稿が存在することから、第2楽章もツヴィッカウやシュネーベルクで演奏された可能性があると考えられており、今回使用する楽譜では、両楽章ともに、そうした複数の稿を参考にして編まれているとのことだ。

第1楽章は、8小節の序奏の後、情熱的な第1主題をもとに、いかにも若きシューマンの熱に浮かされたような息詰まる展開が繰り返られる。第2楽章は、緩徐楽章的な性格とスケルツォ的な性格が一体となった楽章。石川と神戸市室内合奏団による清新な演奏を期待したい。

W.A.モーツァルト（1756～1791）

ピアノ協奏曲 第17番 ト長調 KV453

モーツァルトには思い入れの深かったジャンルが二つあった。一つはオペラ。そしてもう一つがピアノ協奏曲である。ウィーンに出て以来、生活の糧の大きな柱であった予約演奏会で、自ら演奏するために作曲されたピアノ協奏曲は、とりわけ大きな意味を持つジャンルであった。まずは自らがピアノの名手であることを示すこと、さらには対話をしたり競ったりという協奏曲の特色が、自ら至上の表現目標とした「人間の愛の交感」を奏でるに適したものであったということ。深い含蓄がこめられた入念な作りや、人間の真実が見事に集約されたかのような魅力的な旋律には、モーツァルトがこのジャンルをいかに愛していたかが如実に示されている。

今日演奏される第17番は、1784年4月にウィーンで作曲された。第1楽章冒頭の第1ヴァイオリンの軽快で愛らしい旋律からして魅力が零れ落ちんばかり。管楽器の効果的な扱い、弦楽器と管楽器、あるいはオーケストラとピアノの、愛し合う二人が対話を交わしているかのような絶妙なやりとりは、一段と洗練の度と密度の濃さを加えている。ウィーンに移住して3年目を迎えたモーツァルトは人気も高く、弟子たちへのレッスンや演奏活動にも忙しかったが、作曲技法も円熟の度を加えていた。まさにその時期に書かれたのがこの協奏曲である。父に宛てた手紙に「僕と彼女以外の誰のものでもありません」と書いているように、彼の優秀な弟子であったバルバラ・フォン・プロイヤー嬢を念頭に置いて書かれた二つ目の協奏曲で、モーツァルトがとりわけ気に入っていた作品でもある。

第1楽章は清楚で愛らしい第1主題と哀愁を滲ませた第2主題によって協奏風ソナタ形式が展開される。時折挟まれる短調の響きが、いかにもモーツァルトならではの陰翳の深い情感を表出する。第2楽章は非常に甘美な抒情に彩られた旋律を、円熟期に入ったモーツァルトの巧みな書法によって自由に変奏した曲。管楽器の扱いの巧さがとりわけ印象に残る楽章だ。第3楽章は親しみやすい軽みを帯びた主題と5つの変奏からなる。ト短調をとる翳りを帯びた第4変奏が、楽章全体に奥行きを深さをもたらしている。

R.シューマン交響曲 第1番 変ロ長調 Op.38「春」

シューマンのように、ベートーヴェンの衣鉢を継ぐ正統的な音楽家を目指していた作曲家にとって、交響曲というジャンルは、いつかは手を付けねばならない大きな課題であった。しかしベートーヴェンによって途方もない高峰が築かれた後だけに、誰にとっても容易に取り組めるものでもなかった。それ故か、シューマンが作曲家を志した後10年ほどの間に手がけた作品はほとんどがピアノ曲。ただその間も交響的作品を書きたいという思いが途絶えることはなかった。交響曲作曲への思いが一挙に高まるきっかけを作ったのが、1839年にウィーンのシューベルトの兄の家で発見したシューベルトの大ハ長調交響曲との出会いであった。

彼はクララと結婚した翌年の1841年に、いよいよ交響曲に取り組み始める。シューマンがつけていた家事覚え書き（Haushaltbuch：家計簿）には、1月23日に「春の交響曲を開始」という書き込みがあり、翌24日には「アダージョとスケルツォ完成」、さらに26日には「万歳！交響曲が完成！」と記されている。書き始めからわずか4日でスケッチを終えたシューマンは、2月20日にはオーケストレーションも完成。その後浄書された楽譜がメンデルスゾーンに手渡され、3月31日にはゲヴァントハウス演奏会で初演されたのである。わずか2か月余りの速さで完成されたのが、現在《春》という名で呼ばれる交響曲第1番であった。

この作品の着想は、交流があった詩人ベトガーの詩「汝、雲の霊よ」によってもたらされた。詩に触発され、春の息吹を感じながら作ったこの交響曲の各楽章には、当初、1. 春の始まり 2. タベ

3. 楽しい遊び 4. たけなわの春、と表題が付されていたが、初演後の改訂中に、「春の交響曲」という名称や各楽章の表題は、聴き手に先入観を与えかねないという理由で削除された。しかし現在もこの交響曲は、《春》と呼ばれている。

第1楽章は、曲全体のモットーを示すファンファーレが春の開始を思わせる序奏のあと、いかにも生き生きとした春の喜びがあふれるソナタ形式楽章。第2楽章は春の夕暮れを思わせるような和やかな雰囲気流れる抒情的な緩徐楽章。ABACAというロンドの形をとる。第3楽章は、力強く野趣あふれる主部に二つのトリオがはさまれるスケルツォ楽章。終楽章は短い序奏のあと軽快で喜ばしい表情を持った第1主題と活力あふれる第2主題とでソナタ形式が形成される。展開部の最後で奏でられる、山間に響く角笛のようなホルンの音色や、まるで蝶か何かが空中をひらひらと舞っているようなフルートのカデンツァが、シューマンの詩的イメージを生き生きと浮かび上がらせ何とも印象的だ。

指揮	石川 星太郎
ピアノ	ソフィー = 真由子・フェッター
コンサートマスター	白井 圭
第1ヴァイオリン	黒江 郁子 萩原 合歓 前川 友紀 谷口 朋子 山本 美樹子
第2ヴァイオリン	中野 千瑛 ビリヲ良弓光 馬場 和子 脇坂 亮平
ヴァイオラ	西尾 恵子 井上 隆平 中山 裕子 二橋 洋子 奥野 敬子
チェロ	住吉 のりこ 相原 瞳 島戸 祐子
コントラバス	亀井 宏子 中島 悦子 横井 和美 三木 香奈 ベーター・ゴヴァーチ
フルート	法橋 泰子
オーボエ	伝田 正則 山本 彩子 田中 次郎 夏 秋 彩
クラリネット	長谷川 順子 林 俊 武 神山 真澄
ファゴット	中川 佳子 三瀬 直子
ホルン	中根 庸介 菊池 奈緒
トランペット	小谷口 直子 刀田 大生
トロンボーン	石川 晃 八田 菜保子
ティンパニ	垣本 昌芳 小坂 智美 山本 愛沙子 垣本 奈緒子
パーカッション	神代 修 中村 駿介 村井 博之 ロイド・タカモト 三田 博基
	奥村 隆雄
	矢 野 瞳